

---

# はぐれヒツジ

えむ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】  
はぐれヒツジ

【コード】  
N7003W

【作者名】  
えむ

【あらすじ】  
群れからはぐれてしまった1匹のヒツジ。  
そんなヒツジを連れ戻すことになった1匹のヒツジ。  
そんな2匹のヒツジのお話。

## 第1章

「帰ったらレポートが5つ、来週はテストが7教科……気が滅入るな」

そうつぶやいた途端、目の前の信号が赤から青に変わる。

俺は深くため息をつきながら自転車で歩道をゆっくり走りだす。ここから自宅のアパートまで20分も自転車で走らなければいけないことを考えると、更に気が滅入った。

辺りはもうすっかり暗くなっており、通行人はまばら。車もそうそう通らないために静かだった。

「明日レポートも勉強もまとめて終わらせてしまっつか」

通っている大学まで片道1時間半。満員電車で詰め込まれて帰ってきた身としては明日の休みはゆっくりと寝て過ごしたかったがふと、ポケットに入っている携帯電話が振動しているのに気付いた。

俺はペダルを漕ぎ続けたまま、右手をハンドルから離し、そのままポケットの中に突っ込んで携帯電話を取り出す。

「メールか……」

俺は前方に気をつけながら携帯電話を開き、メールの受信ボックスを見る。高校の頃の友人からだった。

『また一緒にバンドやらない？ お前が歌ってくれないと調子出ないんだよねー。返信待ってる』

「もうやらないって言ったろうが……」

画面から目を離し、前をちらりと見るとパトカーが停まっているのが見えた。サイレンは鳴っておらず、赤色灯も点滅していない。

警官2人がパトカーから降りて周りをきよるきよると見回していた。

俺はメールを閉じ、携帯をポケットにしまう。

そのまま車道の隅に停めてあるパトカーの横を通り過ぎようとしたその時。

近くから女性の悲鳴が聞こえてきた。

何かと自転車を止めて振り返ってみると、後ろを歩いていた女性がちょうど俺がいる左側にある5階建てのビルの上のほうを見て口をあんどぐりと開けていた。

俺もつられて上を見上げる。

どこからか漏れた光が落ちてきている物体を照らしている。

空中でバサバサとなびく何かはその光を浴びて綺麗な金色に輝いていた。

「女……の子……？」

そう、金髪で高校の制服を着た少女がまさに目の前に落下してきていたのだった。

俺は唖然となって何も考えられなくなってその場に立ち尽くした。彼女はガラスが砕け散る音やスチール板を強打した時の鈍い音をたて、盛大に俺のすぐ近く、パトカーの上に落下した。

「金子彰かね「あきひ、18歳、と……大学生？」

「あ、はい」

ついさつき、落ちてきた少女を乗せた救急車が発車していった。

誰が呼んだのかしらないが、少女が飛び降りたまさにその時、救急車がサイレンを鳴らしてやってきたのだ。

そして俺は今、事故の目撃者として現場で警官から事情聴取を受けているというわけだ。

「どこの大学行ってるの？」

「えっと、東京文化大学です」

目の前に立つ40代くらいの警官が質問して、俺が答えた内容をもう1人の20代後半くらいの警官が手元のメモに書いていく。

辺りはすっかり静まり返り、通る人といえばサイレンの音を聞いてやってきた野次馬くらいだった。

少女が落下してきた周辺は黄色いテープで封鎖され、大破したパトカーはそのままになっている。もちろん、ビルは立ち入り禁止に

なっている。

「ありがとう、もう行っていいよ。遅いから気を付けて帰るんだよ」  
ついさっき見たことをひと通り話し終わった俺は、警官2人から解放された。

「あの……」

俺は立ち去ろうとする警官に声をかけた。これを聞いておかなければ寝れる気がしない。

「さっきの女の子は、どうなったんですか……?」  
恐る恐る尋ねる。

「ああ、あの子ならうまく車の上に落ちたおかげでとりあえずは一命を取り留めたみたいだよ」

「とりあえず、とは?」

20代の警官が少し渋い顔をして答えたのでつい聞き返してしまっ  
った。

「かなり激しく損傷してたからこれからどうなるかわからないって  
ことよ」

40代の警官がしゃがれた声で答えてくれた。

「そうですか……」

でもとりあえず生きている、ということでも少しホッとする。

俺はこれ以上その場にいる気になれず、自転車にまたがり家への  
道を走りだした。

帰宅した俺は荷物を床に放り出すと、ベッドに身を投げ出した。

疲れきっていた上に飛び降り自殺未遂なんてものを見てしまった  
ので精神が参っていた。

目を閉じるたび、さっき見た光景がフラッシュバックする。

彼女は恐怖に打ちのめされたような表情をしていたな、なんて思  
いだして背筋がゾワゾワした。

目撃した瞬間は何も感じられなかったが、こうやって冷静に思い  
出してみると、身も凍るような恐怖に襲われた。

「もう寝るか」

今夜は眠れないかもしれない……なんて思いながらも電気を消した。もちろん、怖いので常夜灯はつけたまま。

「……………」

何分経っただろう。

全然寝れない。

1人暮らしで家に他に誰もいないため心細い。こういう時は実家暮らしを羨ましく思う。

目を閉じるたび、さっきの光景がよみがえってしまうので、目を開けたままにしているが、そうすると常夜灯がついていて明るくて寝れない。

疲れているにもかかわらず眠気すらやってこないのだ。

目はギンギンに冴えている。

「トイレ……………」

急に尿意をもよおしたのでトイレに行こうとベッドから出てトイレに向かおうとした。

が。

後ろに何か気配を感じる……………気がする。

背中を冷たい汗が流れる。

怖くて振り向くことができず、その場に固まる。

どうしよう。振り返るべきか、それとも無視してトイレに

ペタリ。

頬に触れる冷たく、柔らかい感触。

「ひいっ！」

俺は情けなく声を上げ、その場に崩れ落ちた。

股間のあたりが熱く、湿っていくのを感じる。

だがそんなことはどうでもいいくらいパニックに陥っていた。

俺は必死でその場を逃げ出そうとした。

「え……………ごめん、あの……………」

弱々しい少女の声が後ろから聞こえてきた。

そこで逃げればよかったものを、俺は衝動的に振り返ってしまった。

そこには、少し長めの美しく金色に輝く髪の毛を垂らしたついでつきビルから飛び降りていた、今は病院にいるはずの制服姿の少女が立っていた。

「驚かしたなら謝ります。ごめんなさい……」

少女はとても申し訳なさそうに頭をペコッと下げた。

とても白い肌、輝く髪の毛、透き通った水色の瞳を見て、俺は彼女に見入ってしまった。

高校の制服がとても良く似合っている。清楚ってかんじだ。

スカートも適度に長くて足もキュツと引き締まっていて白くてだが、足元に視線を移して後悔した。俺はそれを見てしまった。

「ぎゃあああああ！」

叫ばざるを得なかった。

そう、彼女は立っていなかった。

宙に浮いていたのだ。

## 第2章

「あの、大丈夫ですか……?」

女の子の声が聞こえてきてゆっくりと目を開く。  
気付くと俺はベッドに再び寝転がっていた。

「いったいどうして」

そう言いかけて先程までの記憶がよみがってきた。

俺の上に屈み込んで顔を覗き込む少女にようやく気が付いた。

彼女の垂れた金髪が鼻先をフワフワとなでる。

心臓が止まりそうになった。

「ひい……こ、殺さないで……」

「いや、別に殺しに来たわけじゃ」

眼の前の少女は困惑した様子で眉をひそめた。

うん、少し落ち着こう。

俺は深呼吸して起き上がり、彼女に向き直った。

恐る恐る聞いてみる。

「君は、あの……さっきビルから飛び降りてた?」

「あ、はい。先程はご迷惑をおかけしました」

謝られた。幽霊に。

いや、待て。あの子は一命を取り留めたんじゃないのか? まさ

か

「死んだ……?」

俺はそう口走って慌てて口を両手で押さえた。

自分の軽率さに反吐が出そうだった。

「実はそうみたいなんですけど」

少女は目に涙をためながら答えた。

なんてことを聞いてしまったんだろう、と後悔した。

「でも私鈍臭いから、ちよっと天国行きの便に乗り遅れちゃったみたいで」

えへへ、と泣き笑いながら彼女は自分の後頭部を軽く搔いた。

「で、なぜ君はここに？」

「折原です」

「へ？」

突然よくわからない単語を即答されて俺は反射的に聞き返してしまっただ。

「名前です、私の。折原<sup>おりはら</sup>漣<sup>みお</sup>っていいいます」

「あ、ああ……」

このタイミングで名乗ってくるとは思わなかったので反応に少し時間がかかってしまった。

変な空気が部屋に流れる。

軽く咳払いをして気を取り直す。

「えっと、折原さん？ なぜここにいるのか説明して欲しいんだけど」

折原さんはうーん、と軽く唸って右上の何も無い空間を凝視した。

「次の便が来るまでにやり残したことをやっておきたくて……どうせ死ぬなら未練なく死にたいじゃないですか」

そう言っただけで彼女は白い頬を少しピンクに染めた。

肌が白いのでそのピンクの部分はひときわ目立った。

彼女は唇をきゅっと締めた。よく見るとその柔らかそうな薄い唇も淡いピンク色をしていた。とても死んでる人間には見えな

「そ、そんなにジロジロ見ないでください」

「え？ ああ、悪い」

怒られたので話を続けることにした。

「それで、そのやり残したことってというのは俺に何か関係があるのか？」

「そういうわけではないんですけど」

きっぱり否定された。

「じゃあ何で俺のところ？」

「私1人じゃできるか自信がなくて、誰かに手伝って欲しかったです」

そう言っ て折原さんはすこしためらった後、こつ続けた。

「それに、他に行ける所がないので……」

少しうつむいている彼女の透き通った瞳はどこか虚空を見つめていて、とても寂しそうだった。

そんな彼女の姿をこれ以上見ていられなかった。

俺はもうこれ以上聞くことはやめた。

「金子彰だ」

「え？」

彼女がパツと顔をあげ俺の目を真っ直ぐに見つめてくる。

「俺の名前だよ」

俺は彼女の顔をまっすぐに見据えてニツと笑っ てやった。

「それで、やり残したことっ てなんなのさ」

シャワー室から着替えて出た俺は頭をタオルでゴシゴシ拭きながら、ベッドに腰掛けている折原に声をかけた。

「ん？」

彼女からいつまでたっ ても返事がないので隣に座っ てその顔を覗き込む。

彼女の目は軽く閉じられていた。

すうすうという寝息が聞こえる。

「っ て寝てんのかよ」

幽霊が寝るのか？など疑問はあっ たが俺は彼女の身体をベッドに横にしてやった。

その安らかな顔を見て、ビルから降っ てきた時の切羽詰まっ た表情を思い出して心がチクリと痛む。

「……寝るか」

そつつぶやいて俺は床に寝転がっ た。

次の日、すずめの鳴く声が聞こえてきて、目が覚めた。

カーテンの隙間から朝日が差し込んできている。

時計を見ると8時を過ぎたところだった。

俺は立ち上がり、カーテンを全開にする。

そしてハッとして後ろを振り返る。

幽霊って朝日浴びて大丈夫なのか？

だが、ベッドの上に折原の姿は見当たらなかった。

「まあ、幽霊が日中出てくるわけないか」

そう言っただけで窓から離れてトイレに向かおうとした

「朝ごはん、まだですか？」

突然耳元に声が聞こえてきて飛び上がる。

振り返るとそこには折原が立っていた。いや、浮いていた。

「驚かすなよ！ てか幽霊って日中活動してて大丈夫なの？」

「そつみたいですよ」

折原はにっこり笑って答えた。

俺は、顔をひきつらせた。

そして俺は狭いキッチンへ行き、いつもより1枚多くトーストを焼いた。

俺の目の前で折原は普通に食パンを食べていた。

「幽霊って食事するんだ」

「そりゃそうですよ、そうじゃないと飢え死しちゃうじゃないですか」

なるほど、わからん。

「ところでやり残したことっていろいろはない何なんだ？」

俺は会話の流れを絶ち切って聞いてみた。

「私的には色々あるんですけど、まあ人生悔いだらけっていうか。」

我人生に無数の悔いありっていうか

「あ、そう……」

何かどこかで聞いたことある台詞だったが俺はスルーした。

折原が少し上目遣いになってムツとしているようだが気にせず話を続けることにした。

「じゃあやり残したこの中で1番やりたいことって何？」

彼女は少し虚空を見つめながら考えていたが、やがて決意したようにこっちを見てきた。

そして少し顔を赤らめながらこう言い放った。

「私、目立ってみたいんです！」

折原の目は眩しいくらい輝いていた。

### 第3章

「目立ってみたいって言われてもな……」

「やっぱり私には無理ですかね」

折原は自信なさ気に少し顔を伏せた。

少し目が潤んでいるように見える。

「いや、そういうことじゃなくて！」

俺は慌ててフォローに入る。

「目立っていてもいろいろあるからさ、その……特技とかは？」  
折原は俺の言葉を聞いて顔を上げる。だが、その目は曇ったままだ。

「私、人に自慢できることなんてひとつもなくて……」

今にも泣き出しそうな顔だ。聞き方を変えてみる。

「じゃあさ、いつも何してた？」

「普段は部屋にこもって、TV見たり、ゲームしたり」

そこまで言いかけてついに彼女の頬に1滴の涙がこぼれる。

俺は焦りながらも少し考え込んだ。どうする……どうすればいい？

目立つ、要するに有名になれば……。

ちらつと目をそらすと視界にPCが映りこんだ。

「あ、絵とか描かない？」

俺はぐずっている折原に恐る恐る声をかける。

彼女は指で涙を拭いながら答えた。

「絵……ですか、まあ描くのは好きですけど」

「よし、それでいこう！」

「え？」

俺は内心でガッツポーズをしながらPCの電源を入れる。

駆動音がして十数秒でPCが立ち上がる。

そしてPCがつくまでの間に俺は物置からノートより少し大きめの薄いプラスチックの板を取り出した。その板からは少し長めのコ

ードが伸びている。

「それ、ペンタブ？」

「ああ」

折原は嬉々とした感じで立ち上がる。

「これ使ったことある？」

「うん、家にもこれありました」

「おお、なら話は早い」

このペンタブは高校時代、バンド仲間に貸してもらったものだった。結局1回も使わなかったのだが。

借りたままだったペンタブがこんなところで役に立つとは思わなかった。

「ソフトとか入ってるんですか？」

折原が身を乗り出して聞いてくる。

なんかノリノリだな、と思いながらもその様子が少し嬉しかった。

「今から体験版ダウンロードしてみようと思ってる。なにか使いたいソフトある？」

「hot to shop!」

即答だった。

「どうだ、様子は？」

俺は昼飯の買い物から帰ってきて、部屋をのぞく。

折原は笑いながら迎えてくれた。

「あ、完成しましたよ」

俺は買ってきた袋の中からジュースの入ったペットボトルを取り出し折原の手元に置いてやる。

「ほら、飲み物」

そう言いながらPCのモニタを覗き込む。

そこで俺は一瞬固まった。

そこには美少年の全身の絵。足を組んで座ってこっちを見下している、様な絵だ。

一瞬トレースでもしたのかと思った。

細めの目、しゅっとした美しい輪郭、綺麗な色使い、完璧なポーズ。バランスもとても自然だ。

「うまい……」

思わず声が漏れた。

「すごい適当に描いたんだけどね」

そう言っただけで彼女はへへ、と照れたような笑みを浮かべる。

俺は驚きを隠せなかった。

「これが、適当……？」

「うん、こここのところのバランスとか少し危ういし、あとここも

」

俺は把握した。こいつ、絵がめっちゃめっちゃうまい。

そういえば普段は部屋にこもっていたとか言っていたからずっと一人で絵描いてたのかもしれない。

「そんなに、変ですか？」

呆気にとられている俺を見て折原は表情を曇らせながら聞いてきた。

「あ、いやそうじゃない。あまりにもすごくて」

「そんな、それほどでもないですよ」

彼女はペットボトルを鷲掴みにし中身をゴクゴクと飲みだした。

「そういえばこれ、どうするんですか？」

「そんなの決まってるだろ」

俺は小さな彼女の肩に手を乗せた。

そしてPCを操作し、ブラウザを立ち上げる。

「えっと、picivvと」

キーボードで文字を入力しイラスト投稿サイトにアクセスした。

自分では使ったことはないが、友人が使っていると言っていたので名前だけは知っていたのだ。

「今まで投稿したことは？」

「その、自信なくてやったことないんです」

彼女は弱々しい声で答えてきた。

これだけの画力を持っていて自信がないとはどれだけ謙虚なのか。とりあえず彼女にアカウントを作らせ、画像をアップさせた。

彼女はそつと声をかけてきた。

「よ、よかつたんですかね。私の絵なんかアップして」

「何言ってるんだ、あれだけ描けるんだから自信持てよ。俺なんか絵描いたところで幼稚園児の落書きにしか見えない」

そう言ってるガハハ、と大げさに笑ってみせる。なんか虚しくなってきた。

「昼飯、食べようぜ」

「はい！」

そう言ってる微笑む彼女の表情が最初よりも少し柔らかくなった気がした。

昼飯を食べ終わった後、俺は再びさつきpicivにアップした絵のページを開いた。

「うおおおー！」

思わず声を上げる。

折原も少し不安そうな様子で寄ってきて画面を覗き込む。

「見るよ、すごい点数付いてる！」

「ほ、ほんとだ」

俺はPCの前の椅子を折原に譲ってやる。

折原は身を傾けながらそのページを凝視し始めた。

その口元が少しにやけている。

「これ、ランキングとやらにも入るんじゃない？」

少し震えている彼女の方をポンポン叩いてやる。

「そんな、私の絵が……」

嬉し泣きか、彼女の目から涙が零れ落ちる。

「コメントも来てるじゃん」

それを聞いた彼女はコメント欄に目を移した。

そこは絶賛のコメントで溢れかえっていた。

「他の人がこんなに褒めてくれるなんて」

そう言っていると彼女はバツと立ち上がってベッドにダイブした。

そして景気良く笑い出した。

彼女は、輝いていた。

その後も彼女には色々なことに挑戦してもらった。

歌を歌ってそれを録音して動画投稿サイトにアップしたり、有名なアニメのアテレコをしてそれを動画投稿サイトにアップしたり。

だがその2つは特に手応えがなかった。

俺のやり方が悪いのかもしれない。何しろ、昔自分で投稿した動画も反応は薄かった。

俺が頑張ったところでこの程度。何しろ目立ったことなどないのだから。

折原にその手の才能はなかった、というわけではないかもしれないということが少し罪悪感をかきたてる。

折原もあまり乗り気ではなくなってきていた。

「まあ、こつこつというってあんまりすぐ反応来ないからな。少し待ってみよう」

そう言っただけでベッドの上で丸くなっている彼女を励ましてやる。

「ありがとうございます。でもやっぱり私のことなんて誰も見てくれないんだ……」

完全にいじけモードに入ってしまったようだ。

どうしたらいいものか、と軽いため息をつきながら何気なくPCのメールソフトを立ち上げた。

「ん……？」

受信ボックスをよく見ると、自分の携帯電話からメールが来ている。

「あれ、いつ送ったっけ」

そう言っただけでポケットに手をつ突っ込んで

その手は空気を掴んだ。

「携帯どこやったっけ？」

部屋中を探しまわるがどこにもない。

とりあえず来ているメールを開いてみた。

『娘が飛び降りた現場に携帯電話が落ちていたので預っています。』

連絡をする手段が他になさそうだったのでメールを送ってみました。

東武病院の205号室で待ってます』

着信日時は今日の朝方だ。もう10時間以上経っていた。

まだ待っていてくれていたとは思えないが……ん？

娘が飛び降りた？

まさか……。

「折原、ちょっと俺出掛けてくるわ。留守番頼む！」

そう言っただけ俺は返事も待たず家を飛び出した。

## 第4章

東武病院へは家から自転車を全速力で走らせれば15分くらいで着ける場所にあった。

俺は病院に着くと、自転車を駐輪場に止め、205号室を目指した。

「失礼します」

ノックをして205と書いてあるドアを開けると、そこには40代くらいの女の人がベッドの横にある椅子に腰掛けていた。

そしてそのベッドには、人工呼吸器をつけた金髪の少女が横たわっていた。

ベッドの脇に置いてある生体情報モニタがピッピッと少女の心臓の鼓動と合わせて電子音を鳴らしている。

「折原……」

顔にも包帯が巻かれていてわかりにくかったが、それは折原溼だ。幽霊になって現れたんだからてっきり死んでしまったのかと

「まだなんとか生きているのよ」

ベッドの横に立って呆然としてしていると、部屋にいた女の人が声をかけてくれる。

「折原……溼さんのお母様ですか？」

「そうよ。あなたが金子彰さん？」

そう言っつ折原母は手元にあったかばんから携帯電話を取り出した。

「あなたのよね？」

「はい、ありがとうございます。どうしてこれを？」

俺は差し出されたそれを受け取りながら聞いた。

「現場検証の立ち会いをしたときに近くで見つけて、娘と同じくらいの年頃の子が1人目撃者にいると聞いたからこっそり拾っておい  
たのよ」

そう言って彼女はベッドで眠り続けている折原に顔を向けた。

「それに、少し話がしたくて……こうでもしないと話を聞いてくれる人がいないのよ」

乾いた笑みを浮べているその顔は、部屋に来たばかりの頃の娘のそれにそっくりだった。

俺は軽く息を吐き、折原母の隣にもう一つ椅子を持ってきて腰掛けた。

「いいですよ。話、聞かせてください」

「澪はね、身内は私しかいないのよ」

「え？」

「私も旦那も兄弟はいなかったし、澪の祖父母、私の両親と旦那の両親はもう病気でみんな他界してて、旦那も先月事故で……」

「そうだったんですか」

俺はいたたまれない気持ちになって折原母から目をそらしてしま  
う。

彼女は構わず話を続けた。

「でね、澪って髪の毛金色じゃない？ あれ、地毛なのよ」

驚いた。てつきり染めていたのかと思っていたからだ。

「旦那さん、外国人だったんですか？」

「いえ、違うわ」

彼女は首を振った。

「私も旦那も日本生まれ、ハーフでも何でもないのよ」

「そういうことってあるんですね」

「ええ、そしてその髪の毛のせいで澪は学校ではイジメられていたのよ。あんまりよくない子が多い中学校だったのよ」

俺は折原の髪の毛に目をやる。

蛍光灯の光を浴びて輝いているその毛は、彼女を苦しめるもの  
しかなかったと思うと、苦々しい気分になった。

折原母は彼女の髪の毛を撫でて眉をひそめた。

「そのうち、漣は学校に行かなくなっちゃって……1回黒く染めてあげただけど、それでもイジメはおさまらなくて」

今にも折原母の目からは水滴がこぼれ落ちそうだった。

「一応受験はして高校には合格したんだけど、そこでもまたイジメられて……」

「髪の毛は染めさせたんですか？」

「ええ、でもその高校には中学が同じだった子がたくさんいたのよ、ひどい話だ。所詮イジメられっ子はそれ以上にはなれないということなのか。」

「それからかしら、部屋にこもりつきりになったのは。部屋から出てくることはほとんどなくなって私とも顔を合わせることはほとんどなかったわ。食事は私が部屋のドアの前に置いてあげていたら、顔は見せてくれなかったし」

俺は言葉も出なかった。今俺の部屋にいる折原とは印象が違ってきた。いや、まあ確かに少し大人しめな性格だとは思ったが、まさかここまでひどかったとは。

「でも、なんでそんな漣さんがわざわざ外に出てこんなことに？」

ひきこもっていたにもかかわらずわざわざ外に出てビルから飛び降りるなんて変だ。死にたかったなら部屋で首を吊るなりリストカットするなりとあつたはずだ、と少し不謹慎なことを考えていると、折原母がゆっくりと口を開いた。

「きつと漣は、私に飛び降りるのを止めて欲しかったんです」

「……と、言いますと？」

彼女はそこで濡れた目を服の袖で拭った。

「あの日の夕方、漣から電話が来たのよ。今から飛び降りるかもってね」

「それで、何て答えたんですか？」

折原母はフツと天井を見つめた。

「私、その時仕事で忙しくて……馬鹿な事言っていないで学校行きなさい、って言っちゃったのよ」

「そしたら本気だった、と」  
彼女はため息をついた。

「そう、本当あの時の自分を恨むわ。それに……」  
そう言っただけで彼女は窓の外に視線を移す。  
俺もつられて窓の外に目をやる。

「あの現場、パトカー停まっていたでしょ？」

「はい」

そう言われればそうだ。あの人は何をしていたのだろうか。とてもパトロール中には見えなかったが。

「あれ、澁が呼んだのよ、救急車も」

「え!？」

「あの子の携帯に発信履歴が残ってたの。110番と119番」

折原はパトカーの上に落下した。だがそのパトカーは偶然あつたのではなく折原自身が呼んだ。それに救護がタイミングよく来るように救急車も

「まさか、死なないように飛び降りた？」

「警察の人はそう言ってたわ」

俺はためらいながらに尋ねてみた。

「あの、娘さんは回復するんですか？」

「それが……」

そう言っただけで彼女は目を伏せた。

「命に別状はなくてももう意識を取り戻してもいいらしいんだけど、全然」

俺の頭に今自分の部屋にいる折原の幽霊の姿が浮かぶ。

もしかして天国行きの便に”乗り遅れた”んじゃないかって”乗れなかった”んじゃないか? まだ生きているから……。

そして、折原は自分が死んでしまったと思っただけでいる?

病室に静寂が流れる。

生体情報モニタだけが規則正しく電子音を鳴らし続けていた。

「金子くん、今日はありがとう。話を聞いてくれて」

「いえ、こちらこそ携帯電話ありがとうございました。じゃあ俺、そろそろ失礼します」

俺はそう言っただけで立ち上がり、頭を下げた。

「またよかつたら来てあげて。漣も喜ぶと思うわ」

折原母はそう言っただけでにっこり笑った。

だがその目には、キラリと光る雫があった。

俺はそれ以上この場にいることは出来ず、彼女に背を向け病室を後にした。

外に出ると、すっかり日が暮れて電灯が煌々と輝いていた。

帰り道を自転車で走る。

俺はその途中にある銀行に寄り、少しばかりお金をおろした。

「これだけあれば十分か」

そうポツリと呟き、再び自転車で走り始めた。

そして家の前にたどり着いて自転車を止めると、携帯電話を取り出し、昨日メールをくれていた高校の友達に電話をかけた。

「あ、もしもし？」

『おう、バンド出る気になった？』

「いや、出ないし。それよりまだあの彼女と付き合ってたの？」

『ああ、この前言った子とはもう別れちゃったわ。でもまた新しい子とラブラブだから心配すんな！』

言い方だけで相手がニヤニヤしているのが伝わってきた。

電話のスピーカー越しに下品な笑い声が聞こえてくる。  
構わず話を振った。

「……ちよつと相談したいことがあるんだけど」

『へえ、彰が相談なんて珍しいな。何よ、言ってみ？』

「実はさ」

これは明日のために必要なんだ、と自分に言い聞かせ、その後延々と続いた憎たらしい言い回しに懸命に堪えた。

翌朝、俺は携帯電話のアラーム音で目を覚ました。昨日の夜にこの時間に鳴るようにセットしてから寝たのだ。

カーテンの隙間から朝日が差し込んできている。

「折原ー？」

俺は床から身を起こし、家主を差し置きベッドに寝ていたはずの幽霊に呼びかける。

今日は昨日のように俺より先に起きていたわけではなく、ベッドの上で猫のように丸くなって寝ていた。

彼女の方をがちり掴んでゆさゆさと揺すってみる。

「ん……なんですか……」

折原は寝ぼけ眼をゴシゴシとこすりながら俺の手を振り払って起き上がった。

「出掛けるぞ」

「行ってらっしゃい」

彼女は即答し、再びごろりとベッドの上で横になった。

「おい……」

とつさに彼女の手を掴んで起き上がらせる。

「折原も一緒に行くんだよ」

「いいですよ、私は。元々引きこもりですからこつやって1日中

」

「話を聞け」

またしても眠りだそうとする彼女を俺は再び力づくで起き上がらせた。

そしてその目をしっかりと見る。

「目立ちたいんだろ？ とっておきの場所があるんだ」

## 第5章

そうして俺たちは、2時間ほど電車で揺られて『帝京夢ランド』という遊園地に到着した。

来る途中で気付いたのだが、折原の姿は案外誰にでも見えるようだ。切符なしで改札を通らせようとしたら駅員さんに止められた。

浮いてるところを見られでもしたら厄介なことになる、と思いや汗をかいたが、歩くときは普通に歩いてくれたので何事も無くなるとか目的地に到着した。

ここに来ることは昨日電話した友達の入れ知恵だった。奴曰く『女の子楽しませたいならここじゃね？ 明日平日だし』とのことだった。

そう、今日は月曜だった。おかげで来客は少なかった。授業をサボる羽目になってしまったが。まあ今日はテストの日程がなかっただけでもよしとする。

「へえーすごいー！」

折原が夢ランドの入口を見て感嘆とした声を上げる。

確かに色々と装飾が施してあって金がかかってそうだ。

「ここ来たの初めて？」

「はい、小さい頃行きたいとは言ってたんですけど両親は連れてきてくれなくて」

「そっか」

何も言えなくなる。

それでも無理矢理言葉を引き出した。

「まあ、俺もそんなに詳しいわけじゃないからまったり回ろうぜ」  
そう言ってチケット売り場に向かって歩き出そうとするが後ろから服を引っ張られて停止する。

折原が不思議そうな目でこっちを見つめていた。

「目立つのにとっておきの場所って……」

「ああ、あれ嘘」

俺はニヤリと口元を歪める。

そのまま手を引っ張り彼女をチケット売り場まで引っ張っていった。

彼女は少し頬をふくらませていたが気にしないことにした。

「見て、ニッキーがいる！」

折原は入場するとすぐに目を輝かせてマスコットキャラクターを指差す。

これは予想以上の反応だ、と内心でほくそ笑む。

「握手でもしてくれれば？」

「え、でも……」

「いいんだよ。ほら、暇そうじゃん」

そう言っただけで彼女の背中を軽く押してやる。

「うん、行きましょう！」

彼女は俺の手を引っ張ってニッキーの元へと歩き出した。

「俺も行くのかよ……」

「さて、何乗ろうか」

ニッキーとの握手を終え、満足そうな顔の折原に場内マップを見せながら尋ねた。

「私、何でもいいです。金子さんが乗りたいやつに」

まあそう思うとは思っていたが、少し考える。

乗りたいやつと言ってもな……

「ジェットコースター大丈夫？」

「私ジェットコースター乗ったことないんです」

「え、そうなの？」

「はい、中学に入ってからずっとひきこもってましたので……」

「じゃあ乗ってみる？」

俺は少し遠くに見える小さめのジェットコースターを指差す。

見ると、やはり折原は不安そうな顔をしていた。

「怖くないですか？」

「このジェットコースターはそこまで怖くはない、らしい」

そう言っただけは少し苦笑いした。まあ他人の受け売りだから胸張っては言えない。

彼女はうーん、とうなりながら腕を組んで考え込んでいる。

「まあとりあえず行ってみようか」

そう言っただけで白く細い腕を掴んでさっき指差した方向へ歩き出した。

ジェットコースター乗り場までたどり着くと、早足で受付まで折原を引っ張っていく。

だが、平日であるのが幸いしたか、そこまで人は多くなく、並んでいる人は数人だった。

「これならすぐ乗れそうだな」

ひとまず安堵して一息つく。

昨日友人に待ち時間は特に気をつけるように言われたからだ。会話が途切れて気まずい雰囲気になると最悪だと。

「なんか意外と高いですね」

折原はコースターのレールを見上げてつぶやいた。

彼女の肩が少し震えた。

「怖い？」

「ええ、少し」

「ま、初めはそんなもんだよ」

その時、コースターが発着所に戻ってくる。

俺たちは係員に案内され、コースターに乗り込む。

安全確認が終わり、コースターが発進し、急なレールの坂を登り始める。

「落ちるときに大声で叫べば目立てるかもよ？」

俺は意地悪く横に座っている折原に耳打ちする。

彼女は頬をふくらませて、ぷいとそっぽを向いてしまった。

その瞬間、コースターが下に向けて傾き、今登ってきた高さを一気に下りはじめた。

横に服を引つ張られる感覚で横を見ると、折原ががちりと俺の袖を掴んでいた。

その顔は恐怖で少し歪んでいた。

思わずニヤリとするが、すぐに眉をひそめた。

「きゃあああああああああああああ！」

彼女は突然嬉しそうな顔をしながら大声を上げた。

鼓膜が破れるかと思った。

その後も、俺が折原を引つ張りまわす、といった感じでアトラクションに乗ったり食べ物を買って食べたりした。

彼女は嫌がる様子もなく俺についてきて楽しそうにしていた。一日、彼女を初めて見てから一番表情が人間らしい気がした。

「お、パレード始まるみたいだ」

そう言っただけは彼女をパレードの通路に引つ張っていく。

遠くからだんだん音楽が聞こえてくる。

よく見ると、パレードの列がこちらに向かってきているのが見えた。

「ほら、あれ」

「ホントだ、すごい！」

前方はパレードを見ようと集まった人で混雑しており、彼女は背伸びしてもっとよく見ようとしていた。まあ浮いているのだが。

と、その時突然折原の身体が傾き、前に倒れそうになった。

「ひゃあ!？」

「すみません！」

後ろから男性と女性の声が聞こえてくる。

折原の足下を見ると5歳くらいの女の子が尻餅をついていた。

どうやら女の子が後ろから突っ込んできてしまったようだ。

折原は、というとなんとか態勢を立て直し倒れずに済んでいた。

だが、お尻の辺りに何やら白いものがついてしまっていた。

「冷たい」

見ると、5歳女子の左手にはソフトクリームらしきものが握られていた。

どうやらそれがぶつかつたときに折原についてしまったようだ。

「本当すいません」

駆け寄ってきた親と思われる男女がペコペコと頭を下げてくる。

「あ、大丈夫です。こちらこそ……」

折原は折原でなぜかペコペコ頭を下げている。

「ほら」

俺はハンカチを取り出して折原に渡してやった。

ペコペコ頭を下げながら親子が去っていく。

「大丈夫か？」

「うん、たぶん」

いつの間にか、パレードはすぐ目の前まで来ていた。

「わあー」

折原は再び背伸びして、パレードの方に向き直った。

だがその表情はさっきまでより少し曇っていた。

パレードはすっかり見えなくなってしまって、周りにいた人もぞろぞろと散らばっていった。

「次、どうするか……」

「金子さん、ちょっとトイレ行ってきていいですか？」

「ああ、いいよ」

「ちょっとさっきのソフトクリームのベトベトもついでに洗ってきます」

見ると、折原の顔が少し赤っぼくなっているように見えた。

「じゃあ、あのベンチに座って待ってるよ」

「はい……」

そう言つと彼女は小走りでトイレまで走っていった。

よつぽどトイレに行きたかったのだろうか、そんなことを考えながらベンチのところまで歩いて行き、腰掛ける。

そのまま、約10分が過ぎた。

折原は戻ってこなかった。

## 第6章

「遅いな……一体何してんだか」

少し心配になり、トイレの方まで様子を見に行く。

トイレの周辺には折原の姿は見当たらない。

「しまった、女子トイレの中は入れない……」

その後、近くを通りかかったおばさんに確認してもらったがトイレには誰もいなかった、と言われた。

思わず周りを見渡す。

「まったく、どこに行ったんだ？」

俺は少し心配になり、折原を探して場内を走りまわった。

日が暮れそうになった頃。

人がほとんど通らない、アトラクションの裏にある小道。

そこに彼女はいた。

小さな背中を震わせ、しゃがみ込んで泣いていた。

走って乱れた呼吸を落ち着かせ、彼女の元へと歩いて行く。

「探したぞ、何してんの」

そつと声をかけたが、返事はない。

俺は彼女の隣にしゃがみ込む。

彼女は目を合わせようとはせず、ひたすら地面を見つめていた。

しばらく、沈黙が続く。

「私、ただ寂しかったのかも」

ようやく、折原が口を開いた。

「あの親子、楽しそうでしたよね。やっぱりああいうのが幸せって  
いうんですよね」

「そうだな」

「なんで……飛び降りなんてしちゃったんだろ」

そう言うと、彼女は宙を見上げた。

その目は少し赤く腫れていて、頬には涙が絶えず流れていた。

「まだ、生きていたかったです」

「後悔してんだ？」

そんな横顔に尋ねる。

「うん。本当は死ぬ気なんてなかったんです。ちゃんと死なないように計画を立てて」

「知ってるよ」

「え？」

折原は口をぽかんと開けてこっちに顔を向けた。

「バレてないとも思っていたのか？」

まあ俺自身も折原母に教えてもらうまでは知らなかったわけだが、そのことはあえて黙っておいた。

「……恥ずかしいです」

「そっだな」

そっぽを向いた折原を見て軽く笑う。

「でも俺もさ、わからなくもないんだ」

彼女はそっぽを向いたままだ。構わず続ける。

「そっやって、無理矢理にでも誰かに見て欲しいって思うの」

「べ、別にそっいうんじゃない」

「ちよつと聞け」

少し頬を赤くして反論してきた彼女の言葉を遮る。

「俺もちよつと前まで目立ちたくて色々やってさ、バンドやったりネットで歌った唄アップしたり色々やった」

思い出すと小っ恥ずかしくなるようなことばかりだったが。

「でも中々認められてるって実感がなくてさ、それどころか本当にやりたいこととの区別がつかなくなって自分が本当にやりたいことがわからなくなっ……まあさすがに飛び降りしなかったけど」

「皮肉ですか？」

折原が上目遣いで睨みつけてきた。無視して続ける。

「それで、もう何もしたくなくなっって、バンドもやりたくなくなっ

て生きているのも辛くなつて何もかも投げ出さなくなつて。そんな時だったかな」

そう言つて昨日の電話を思い出す。

「バンドの仲間が俺のことを必要だつて言つてくれて。相談に乗つてくれて。初めて気付いたんだよ」

俺は彼女の目をまっすぐに見つめる。

「たとえ、大勢に認めてもらえなくても、誰か認めてくれる人がいる。それは近すぎて気付かないかもしれないけど、必ずいる」

折原は視線をそらした。

「そうですね、私も本当は誰かに認めて欲しかった。私のことを見て欲しかった。でも、それは金子さんの話です……私には認めてくれる人なんかいませんよ」

「いるさ」

そう言つて無理矢理彼女の視線上に移動する。

「俺は信賴していない人間なんかとこんなところに来たりしない。そんな人間なんかの相談には乗らない」

またしても彼女は目をそらそうとする。

「でも私は友達だつていないし」

「だから！」

思わず大声が出てしまった。

折原は少しビクツとした。

「俺が友達になつてやるつて言つてんだよ」

俺は羞恥心を殴り捨てた。

「でも私、もう死んでるんですよ！ここに存在していちゃいけないんですよ！」

いきなり彼女は立ち上がり泣きながら叫んだ。

「もっと生きていたかった！もっと楽しい人生送りたいかった！なのにこんなのって」

俺もゆっくり立ち上がる。

「まだ諦めるのは早いだよ」

そう言って彼女の手を握る。強く、優しく。

「今からだって、まだ遅くない。まだ閉園時間まで3時間くらいあるしな！ まだまだこれからじゃない？」

「う……はい……」

彼女の目から特大サイズの涙の粒が滴り落ちた。

俺はその涙をそっと拭ってやり、笑いかける。

「どこ行きたい？」

「じえ……ジェットコースター！」

「よきた！ 行くぞ！」

俺は彼女の手を引っ張り、走り出す。

ジェットコースター乗り場に人はほとんどおらず、2、3人しか並んでいなかった。

「これならすぐ乗れるな」

「はい、あの……ありがとうございます」

折原が目線を下に向けながら軽く頭を下げてる。

俺はその金色の髪の毛をぐしゃぐしゃとしてやった。

「な……なにするんですか！」

「1回やってみたかったんだよな」

そう言って俺は笑う。

彼女も、笑う。

その時、コースターが発着所に戻ってくる。

俺たちは係員に案内され、コースターに乗り込む。

安全確認が終わり、コースターが発進し、急なレールの坂を登り始める。

「もういきなり叫ぶのはやめてくれよ？」

「いいじゃないですか、目立つし」

彼女はニヤリと笑いながら意地悪そうな表情を浮かべた。

「そんな顔するんだな」

俺もたまらずニヤニヤする。

俺の袖は隣にいる折原の手にしつかり掴まれ固定されていた。

ここはさつき乗った時と変わっていない。

だが、明らかに彼女の拳動は最初のそれとは違って見える。一皮むけた、って感じか。

「本当に、感謝してます」

彼女の透き通った瞳が、俺の目をまっすぐに見つめてきた。

俺は少し照れくさくなって思わず前を向いた。

その瞬間、コースターが下に向けて傾き、今登ってきた高さを一気に下りはじめた。

その時の彼女は、ビルから飛び降りてきた時とは正反対な、幸せに包まれたような顔をしていた。

そして彼女が大きく口を開け、息を大げさに吸い込む。

俺は耳を塞いでその音に備えた。

……。

……。

だが、声はいつまで経っても聞こえてくることはなかった。

コースターがレールの上を駆ける音だけが聞こえてきた。

俺は、さつきまで固定されていた袖が解放されているのに気付く。

俺の隣には、誰もいなかった。

## エピソード

目の前の信号が青になり、それを待ちわびていた大勢の人たちが一斉に広い横断歩道を渡っていく。

俺も遅れまいとその流れに乗る。

やはり都会の人混みは苦手だ、そんなことを考えながら俺は空を見上げた。

その人混みの中に帝京夢ランドのおみやげ袋を持っている子供がいるのが見えた。

両親に手をつながれ、嬉しそうな顔で笑いながら歩いている。

俺は、去年夢ランドに行った時のことを思い出した。

折原があの後どうなったかは知らない。彼女とは一切連絡をとっていない。

連絡を入れてみようかとも考えたが、そもそも幽霊じゃない彼女と俺は何の接点もないわけで、彼女に幽霊だった頃の記憶が残っているのかも怪しいのであえてやめた。

それにあえてここで突き放すことで、自分の力で孤独の中から這い上がって欲しかったのだ。

「おーっす」

振り返ると、いつの日か相談に乗ってくれた友人が立っていた。

「金子がやっと戻ってきてくれる気になったとはな、待ちくたびれたぜ」

「まあ、たまにはこういうのもいいなって思ったんだよ」

友人がニタリと笑う。

「じゃ、行こうぜ。あっちでみんな待ってる」

友人はそう言うつと早足で人混みの中へ歩いて行ってしまった。

俺も急いで追いかける。

「おい、ちよつと待」

そう言いかけた時、俺の視界の隅にあるものが入った。

キラリと陽の光を浴びて光るもの。

綺麗な金色の髪。その持ち主は約1年前、目の前に現れた少女にそっくりだった。

俺はよく見ようと振り返る。

その金髪の女は人混みに紛れて歩いていった。

間違いない、そう思って声をかける。

「おい！」

だが。

とつさに名前を呼ぶのはやめた。

彼女の隣にはもう1人、同じ年頃の少女と一緒に笑いながら歩いていた。

「おい、金子！ 何してんだよ！」

人混みの向こうから友人が呼んでいた。

少女たちとはもうかなり距離が離れてしまっていた。

やがて、彼女たちは俺の視界から消え去る。

「ごめん、今行く！」

俺は、人混みに足を踏み出した。

## エピソード（後書き）

ここまで読んでくださった方、ありがとうございました！  
もしよろしければ感想や批判など、何でもいいので書いていただけるとありがたいです。

今後の参考にしようと思っっているので、ぜひお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7003w/>

---

はぐれヒツジ

2011年9月16日03時27分発行